

「西方の人」の運命と美（その五・終章）

高田 瑞穂

（八）「クリストの一生」

——「天上から地上へ」の問題——

「西方の人」の第三十六章「クリストの一生」は、第三十七章「東方の人」をもその内に加えて、全編の終章である。換言すれば、終章である「東方の人」は、「クリストの一生」に対する一の付言である。

「続西方の人」は、第二十一章「文化的なクリスト」を経て、第二十二章「貧しい人たちに」で終る。ここでは、第二十二章が全編の終結である。

「勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに

情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに存してゐる。」

「クリストの一生」はこういう要約に始まる。「聖霊」すなわち「永遠に超えんとするもの」の宿命の表象が、「彼の十字架上の悲劇」であつたとしたら、あらゆるクリストたちにとって「十字架上の悲劇」こそ、その生の終局的イデアであるべきであつた。芥川の晩年の心奥に、そういう夢のあつたことは、その死の前日の筆に成る「貧しき人たちに」に徴しても明らかであろう。その結末の一節を引こう。

「彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしい
ジャアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古
今に珍らしい天才だつた。『予言者』は彼以後には流行
してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであ
らう。彼は十字架にかかる為に、——ジャアナリズム至
上主義を推し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。」
今、芸術至上主義に徹しようとした芥川の上にも、「あ
らゆるものを犠牲に」しなくてはならない瞬間が迫りつつ
あった。既に「或阿呆の一生」は書き終えられていた。

「僕は今不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議に
も後悔してゐない。(略)ではさやうなら。」という一節を
ふくむ前書きを、久米正雄宛てに綴つて、「或阿呆の一生」
全編をこの友に托そうとしたのは、昭和二年六月二十日の
ことであつた。「或阿呆の一生」の結末第五十一章「敗北」
は、やがて芥川文学自体を「敗北の文学」と規定する考え
方を生む一つの有力な契機をなしたことは周知の通りであ
る。

「彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず嘔さへ
流れ出した。彼の頭は〇・八のヴェロナアルを用ひて覺
めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しか

もはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だつた。
彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言は
ば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしなから。」

いかにもみじめな「敗北」の表象である。しかし、ここ
にも、多少のグンディズムの感得されることも否定できな
いであらう。先にも引いた「続西方の人」第二十章「受
難」の冒頭で、「十字架にかかつたクリストは多少の虚栄
心を持つてゐたものの、彼の肉体的苦痛と共に精神的苦痛
にも襲はれたであらう。」と記した芥川であつた。その芥
川が、今、自分を自分の手によつて十字架にかけようとし
つつ、自分の生を「敗北」と題して右のように断定したの
である。「受難」の表現はここでは前後が逆様にされてい
る。「彼は彼の肉体的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれた
ものの、多少の虚栄心は持つてゐた」にちがいない。その
ことを、より明確に告げるものが、「クリストの一生」の
末尾の一節である。

「クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生ま
れた聖霊の子供たちの一生を象徴してゐた。(ゲエテさ
へも実にこの例に洩れない)クリスト教は或は滅びる
であらう。少くとも絶えず変化してゐる。けれどもクリ

ストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま……」

ゲエテ？ なぜゲエテがここに登場しなくてはならないか？ そのことは後でふれることとして、ここで先ず凝視する必要のあることは、「クリストの一生」の芥川による最後の、最後の力をふりしぼっての断定である。それはおのずから、自分の一生、「或阿呆の一生」の評決にもつながった。だからこそそこに、詩的精神の最後の生動が感得されずにはいけないのである。再記する。

「それは天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま……」

この「天上から地上へ登る」という表現に関しては、爾来二様の享受が生じ、今日においても未だ明確な止揚はなされずにいる。

「天上から地上へ登る……原稿も、『改造』の初出もこのままであるが、『地上から天上へ……』とすべきで、芥川の誤謬と思われる。『ヨハネ伝』第二〇章一七、『我にさばることなかれ、我はまだ我父にのほらさればな

り。わが兄弟に行きて云へ。我は我が父即ち汝等が父、わが神即ち汝等が神に昇る。』」

これは、吉田精一氏の見解である。ここに引いたのは、『日本近代文学大系』第三十八巻『芥川竜之介集』（昭和四五・二、角川書店刊）の頭注であるが、氏は早くから如上の誤謬説を採って今日に到っている。そこから、学界における一の定説が生れたのであった。しかし、反論も無くない。例えば、梶木剛氏は「芥川における知識人と大衆」（昭和四五・一一『国文学』）において次のように主張する。

「わたくしなどにはこれはすぐれて含蓄のある瞭然たるものに見えるが、一部には議論の多い箇所のようにである。というのは、『天上から地上へ』という味読すべき部分を、吉田精一などは『地上から天上へ』というように巧みに擦り替えているし、わが佐古純一郎もその引用において同じような曲芸を行っている、ということなどがその例である。しかしそういう擦り替えや曲芸の必要は何もない。わが芥川竜之介にとつては、クリストの一生が『天上から地上へ登る為』に斃れた不幸な一生として観じられ、それゆえに彼ののちのあらゆる『聖霊の子供たち』の一生を象徴して

いと観じられたがゆえに、愛さなければならなかったのである。(中略) いかえれば、破滅の回避可能な知識人の唯一の位相は、飛翔する天上からマリアの地上(大衆的現実)へ向けて無限に帰還しつづける還相の包括がいがない、ということである。つまり知識人は、往相と還相の弁証的構造のアポリアを生きる以外に、原罪を免れる道はないということだ。」

吉田精一氏の誤謬説の根拠とされている「ヨハネ伝」第二章一七は、復活したイエスを最初に見たマグダラのマリヤに向けて告げたイエスのことばである。もしそこに「地上から天上へ登る為は無残にも折れた梯子」を裏づけるものを見るとしたら、「我はまだ我父にのぼらざればなり。」という宣示であろう。しかし、ここからは「無残」という印象は享受し得ないであろう。言葉を続けてクリストは告げる。「我は我が父即ち汝等が父、わが神即ち汝等が神に昇る。」と。そこには何一つ「折れた梯子」は感得されない。既にこのことは、十字架にかかる以前のクリストの告げるところでもあった。同じく「ヨハネによる福音書」第十六章において、イエスは弟子たちに「わたしは父から出てこの世にきたが、またこの世を去って、父のみも

とに行くのである。」と告げ、次いで第十七章において、「天を見上げて」言う。

「わたしはもうこの世にはいなくなりませんが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ。わたしに賜わった名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。」

さらにイエスはことばを継いで祈る。

「わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです。わたしが御願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることあります。」

クリストの悲願は、自らが天に登ることではなく、「世のもの」「悪しきもの」の教導に他ならなかった。その故に彼は、「世のもの」「悪しきもの」によって十字架につけられたのであった。このことを裏づける根拠は決して一二に止まらない。

「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、

あなたがたに我慢ができようか。」（「マルコによる福音書」第九章）

「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」（「ルカによる福音書」第二十三章）

もう言ってもよからう。クリストの「地上から天上へ」の梯子は決して「無惨にも折れ」たりはしていなかったのに対して、逆に「天上から地上へ」橋渡しをする梯子は、たしかに「無惨にも折れた」のであった。だからこそクリストは、繰返して教えなければならなかったのである。

「ああ、エルサレム、エルサレム、予言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。わたしは言っておく、

『主の御名によってきたる者に、祝福あれ』

とおまえたちが言う時まででは、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう。」（「マタイによる福音書」第

二十三章）

そういうクリストに対して、「おまえたち」の仲間は、最終的に次のような態度を示したのであった。

「彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。そして、ある者はイエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたいて『言いあててみよ』』と言いはじめた。また下役どもはイエスを引きとって、手のひらでたたいた。」（「マルコによる福音書」第十四章）

十字架上のイエスの口から、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びの生じたのも、当然であったにちがいない。正しく「無惨にも折れた」クリストの生の瞬間であった。そしてそれは、クリストの「天上から地上へ」の生の終末であった。

私は、もともと「復活」を、聖霊の子クリストの運命と美との地上に残した刻印、時の流れを超えて生動し続けた映像と考えた芥川とともに、「クリストの一生」は「天上から地上へ登る為は無惨にも折れた梯子である」と考えた。そういうクリストの一生を思い、そこに真の天才に不可避の宿命を覗いたとき、芥川の内には「薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨」が落ちたにちがいないことを信じ

て疑わないのである。第三十七章「東方の人」では、そういう宿命の普遍性を、「東方の人」老子に即して付言した芥川であった。

「天上から地上へ」の問題については、以上で私の享受が、吉田精一説の対極に立つ梶木剛説にはほ重なるものであることは明らかとなったと思う。ただ梶木説とも多少の相違が無いわけでもない。それは次の一点である。再度短い引用を重ねる。

「破滅の回避可能な知識人の唯一の位相は、飛翔する天上からマリアの地上（大衆的現実）へ向けて無限に帰還しつづける還相の包括がいけない、ということである。」

これと「クリストの一生」の一節とを並べよう。

「彼は実には人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも円まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我々のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた為ではない。マリアの子供たちは麦島の中や長椅子の上にも充ち満ちてゐる。いや、兵営や工場や監獄の中にも多いことであらう。我々のゲエテを愛するのは唯聖霊の子供

だつた為である。我々は我々の一生の中にいつかクリストと一しよにあるであらう。ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの髯を抜いてゐる。」

芥川のゲエテに寄せた憧憬は、その「人生の上にはクリストよりも更に大きかつた」からではなく、彼が「マリアの子供だつた為ではない」としたら、芥川の内なるゲエテもまたクリストと同じように「破滅の回避」を願った詩人ではなかつたはずである。換言すれば、芥川は、「天上からマリアの地上へ向けて無限に帰還しつづける還相の包括」においてではなく、「天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子」において、クリストの一生の、ひいてはゲエテのそれへの感銘を告げているのである。そこには恐らく、観念的思惟による回生の道は残されていないであらう。そこに梶木説と私見との幾らかの間隙も生じざるを得ないのである。

八章にわたつたとりとめのない一文をここで一応打切ることとしたい。最後に、現に私の内に生きつつあるゲエテのことばを一つ掲げて筆をおくこととする。ゲエテの死の前年に当たる一八三一年に記された、いわばゲエテの文学

的遺書「わかき詩人におくる言葉」の結末である。大山定一氏の訳によってそれに私は接した。それをここに引きたい。

「ポエジイの内容は、作家の生活の内容である。この内容は誰も与えることができぬ、同時に、誰も奪うことができぬものだ。虚飾、すなわち空しい自己欺瞞は、もつとも醜悪である。しかし、自己の自由を宣言することは、おそろしい冒険といわねばならぬ。自由を宣言することは、自己の自律を宣言するのにはかならぬからである。誰が自己制御の確信をもちうるだろうか。わたしはわたしの友にわかき詩人に言おう。きみたちはもはや何らの束縛も規範も持たぬ。きみたちはきみたち自身で規範をつくらねばならぬ。きみたちは一つ一つの詩において、自ら問うがいい。きみたちの詩には体験が生きているか？ きみたちの体験がきみたちの生活を高めているか？」

もし芥川に向けてゲエテがこう語りかけたとしたら、芥川は何と答えたであろうか。